

高野山大学図書館所蔵『弁正論』について

藤 原 智

一 はじめに

筆者は、これまで親鸞（一一七三—一二六二）が主著『教行信証』に引用した法琳（五七二—六四〇）『弁正論』（貞観九—十年〔六三五—六三六〕頃）の底本について検討してきた（藤原二〇一七）。そこで、中世に書写された古写本として七寺（安元三年〔一一七七〕、興聖寺（貞応三年〔一二二四〕）、金剛寺（嘉禎三年〔一二三三〕）の一切経、および当時大陸から輸入された版本との関連として高麗初彫版、高麗再彫版、金版、福州開元寺版、磧砂版の大蔵経、そして上記それぞれの一切経中の道宣（五九六—六六七）『廣弘明集』（麟徳元年〔六六四〕）に孫引きされた『弁正論』、これらの十数種の親鸞引用箇所本文の比較検討を行った。結論を述べれば、七寺本、興聖寺本、金剛寺本の『弁正論』は、版本とは異なる系統の一群であり（以下、古写経系）、親鸞の引用もこの系統である。ただし、興聖寺本には開宝蔵からの影響と考えられる箇所が多くあり、親鸞の引用にも僅かだが宋版の影響が見られる。

『弁正論』の日本における最も古い記録は、『正倉院文書』の天平十九年（七四七）六月七日の書写記録にある「弁正論八卷」という記述であり、その後二度の書写記録がある。この奈良写経の伝播として上記古写経系諸本があると推測される。ただし、正倉院聖語蔵に『弁正論』は遺されておらず、実証はできない。これとは別に、『弁正論』が日本に傳來された記録として、空海（七七四—八三五）が大同元年（八〇六）十月二十二日に上程した『御請来目錄』がある。そこには、『弁正理論一部、八卷、法琳師撰⁽²⁾』とある。ただし、この空海請来本は現在知られていないようである。

ところで、高野山大学図書館には『弁正論』の古写本が所蔵されている。⁽³⁾ 本稿ではこの高野山大学本を紹介し、空海請来本を伝えている可能性について検討したい。

二 高野山大学本の書誌情報

高野山大学本は、金剛三昧院からの寄託として図書館に所蔵されており、各巻冒頭辺りに金剛三昧院の押印がある（巻

第六を除く。全八巻の内、巻第一、第四、第六、第七、第八が現存している。装丁は粘葉装冊子体で、両面書写されている。管見の限り、現存する十三世紀頃までの『弁正論』は全て一切経の一部として存在し、卷子本もしくは折本である。この装丁の違いを重視すれば、この古写本の底本がもともと単行本として伝来していた可能性も考えられる。縦は二四・二糎。横は一五・五糎。天界〇・九糎。地界〇・九糎。界高二二・四糎。界幅一・八糎。一頁八行。一行の文字数は十七（二十文字程度と一定しない。糊代部分に丁数が記されている。折り目の上下には補強がされており、その為に見えなくなっている文字がある。なお、巻第四の押印は、この補強の上からされている。また、巻第七に紙の端に書かれた文字が切れている箇所があり、書写の後に形を整えるためか、裁断されたようである。各巻外題には「辨正論巻〇」とあり、表紙は後から付け直された可能性もある。本文は、途中で明らかな字体の変化があり、複数人の分担で書写されたようである。巻第四以外には奥書があり、奥書は全て同一の筆跡と考えられる。奥書は以下の通り（□は判別不能、／は改行）。巻第一「弘長元年十一月十一日於高野山東別所東禪院南／坊校合了是覺生房 一帖助成誂他人／令書写但料紙不足之間半丁書貽返送之間交／惡筆書統奥文而已／小野末塵南山隱士（花押）。巻第六「弘長元年（辛酉）十一月二日於高野山東禪院

南坊挑貧侶之□終／疎略之一校是蓮華谷邊人勝円房 結縁助成之分而已／小野末葉嚴杲」。巻第七「弘長元年（辛酉）十一月四日酉刻於高野山東禪院南坊乎／校合了是／小野末葉權少僧都（花押）。巻第八「弘長元年（辛酉）十一月廿日酉刻於高野山東禪院／乎校合了是／小野末葉（花押）。これに依ると、この古写本が校合されたのは弘長元年（一二六二）十一月ごろであり、その場所は高野山東禪院の南坊である。なお現在、東禪院は残っていない。校合を行ったのは小野流で権小僧都であつた嚴杲という人物である。小野隨心院流に流祖増俊―顕嚴―親嚴―宣嚴―嚴杲という系譜がある⁽⁴⁾。この嚴杲の生没年は不詳だが、宣嚴は建長三年（一二五二）に没しており、年代的には合致する。巻第一の「覺生房」、巻第六の「勝円房」は書写に関わつたのだろう。なお、巻第一の奥書後半の文章は、巻第一の本文末尾十六行が明らかに別筆であり、その事情を指すと見え、書写と校合は同時期だと考えられる。書写の経緯は不明。巻第四、第六、第八には巻末に本文と同筆と思われる音釈があり、これは後述する。

この古写本五冊は薄い包紙に覆われて保管されており、包紙の表には「辨正論第六―一―四―七―八」と記されている。裏には不空（七〇五―七七四）訳『瓊瓔梨童女經』の経文や、「口云」としていくつかの文章などが記されている。ただし、『瓊瓔梨童女經』と『弁正論』との直接的連関は見

当たらず、反故紙を利用したのではないかと考えられる。

三 『弁正論』の構成

高野山大学本の特徴について、本文を検討したい。

まず、『弁正論』は版によつて構成が異なる。具体的には『弁正論』は八巻十二篇からなる。古写経系と高麗版は巻第六に「十喻篇第五」「九歳篇第六」「氣為道本篇第七」の三篇を収めており、これが本来だと考えられる。福州開元寺版では、この「十喻篇第五」の前半部分が巻第五に移されている。思溪版以降では、それに加えて「氣為道本篇第七」が巻第七に移されているのである。この点を高野山大学本で確認すると、古写経系や高麗版と同じ構成である。

次に古写経系と、版本系（高麗初彫版、福州開元寺版、思溪版）との大きな構成の異なりを見たい。それが巻第四の「十代奉仏篇下」である。この篇は、中国において仏教を尊崇した人物の事蹟を時代ごとに列挙する。この篇での相違点として、大きく次の二点が指摘できる。一つ目は、版本系では「十代奉仏篇下」で取り上げられる人物名が、巻の冒頭に目次として抄録・列挙されている点である。この目次部分は膨大な分量があるが、七寺本・金剛寺本には存在しない。なお興聖寺本には存在している。二つ目は、列挙される人物の登場順序が、版本系はほぼ一致するが、七寺本・金剛寺本は一

致して版本系と大幅に異なっている点である。なお、興聖寺本は多少の混乱はあるものの、「齊侍中秦王高彥昇」（大正五二一五六上）までは古写経系の配列になり、そこから版本系の配列に切り替わる。この二点を高野山大学本で確認すると、共に古写経系と一致する。つまり、高野山大学本は全体の構成からすると古写経系の系統であることがわかる。

ところで第二点目について、慧琳（七三七―八二〇）『一切経音義』（元和二年（八〇七）、以下『慧琳音義』）が問題となる。この『慧琳音義』には『弁正論』も取り上げられ、いくつかの語句の注釈がなされている。問題は、『弁正論』巻第四から取り上げる語句の掲出順序であり、それが版本系本文での登場順序と異なるのである。けれども古写経系本文に照らし合わせると、『慧琳音義』の掲出順序と合致する。また、第一点目に関連して、版本に存在する巻冒頭の目次部分の語句を『慧琳音義』は一切採用しておらず、この目次部分がなかった可能性がある。これらの事実は、慧琳が参照した、換言すれば空海が入唐した西暦八百年頃の唐には古写経系と同様の構成の『弁正論』が存在したことを指示する。

なお上記二点は、興聖寺本の例から、現存していないものの開宝蔵（開宝五年（九七二）―太平興国二年（九七七）頃開版）に想定される。『慧琳音義』から開宝蔵に至る何らかの段階で、本文が大幅に改変されたと考えられる。

四 音釈についての検討

次に高野山大学本に特殊な点を考えたい。それが、巻第四、第六、第八の巻末附載音釈である。管見の限り古写経系や高麗版の『弁正論』に音釈はない。音釈が存在するのは福州版、思溪版からである。福州開元寺版『弁正論』（紹興二十年（一一五〇）の音釈を見ると、その巻の分け方は先に見た古写経系や高麗版と同様となっており、本文より先の成立であることがわかる。さらに詳しくこの音釈を見ると、巻第四において語句の重複が散見される。福州版一切経附載音釈の研究を行った山田二〇〇九は「巻内で重複字が掲出された例を見ない」と報告しており、それに対するとこの音釈は異様である。そこで重複の特徴を見ると、先に指摘した巻冒頭の目次部分の語句に対する音釈で、総数三十七のうち二十と頻繁に起きていることがわかる。ここで注意すべきは、古写経系では目次部分が存在していないことである。つまり、目次部分をもたない本文に対し音釈作業が行われ、その後、目次が作成されると共に音釈も写し取られたため、重複が起った。重複しない語句については、本来の音釈を削除したか、目次作成以後に追加された音釈と考えられる。

以上の考察から導かれるのは、福州開元寺版音釈の起源として、開宝蔵以前、目次をもたない状態の『弁正論』本文に

対する何らかの音釈の存在である。その一つとして『慧琳音義』があるが、その他として、高野山大学本の巻末附載音釈が注目される。この音釈は一字ずつ、「音〇」もしくは「〇〇反」という形で、音情報に限定して付けられる。これと同様の音釈の形式としては、山田二〇〇五が紹介する延暦十七年（七九八）の奥書を持つ『観仏三昧海経』巻第一があり、八世紀後半まで遡ることができよう。

その上で、この高野山大学本音釈と福州開元寺版音釈を比較したい。高野山大学本音釈に掲出される文字数は一四三（巻第四は六七、第六は六一、第八は十五）、そのうち福州版音釈との重複は、判断に迷いもあるがおよそ一一八（同様に五一、五二、十五）であり、八割以上の高い割合で重複する。その中でも、巻第四の「驚（音至）」や巻第六の「謐（音密）」などは、音釈の内容自体も完全に一致する。これは両音釈の何らかの連関、具体的には高野山大学本音釈に類するものを増補・改訂して福州版音釈ができた、と想定できる。要するに、高野山大学本音釈は福州版音釈の原型の一つであり、日本ではなく唐で作成されたと考えられるのである。

ここで、他の古写経系諸本に音釈がある例を見ないという疑問が生ずる。これは、古写経系の元と考えられる正倉院本での音釈の有無という問題を惹起する。もしそこになければ、高野山大学本の由来は正倉院でなく、空海請来本がまず

想定されるのであるが、資料の制約上不明である。

五 『弁正論』諸本の本文比較

最後に、高野山大学本が正倉院に由来するのか否かの検討のため、諸本間の本文の異同を検討したい。筆者は既に『弁正論』諸本、および『廣弘明集』所収『弁正論』について、親鸞の『弁正論』引用箇所約二八〇〇文字について異同を検討した。その結果は、大まかには古写経系と版本系と『廣弘明集』系との三系統に分類でき、『教行信証』は古写経系に含まれるというものである。『弁正論』全体からすると限定的だが、その検討結果と高野山大学本との比較を行う。

高野山大学本は全体の構成からは古写経系と指摘できるものであり、本文の検討でも古写経系に特有の文字を多く共有している。けれども、しばしば版本系の文字が検出されることがある。ただし、これは根本の正倉院での書写に際しての誤写に起因すると考えれば、高野山大学本が正倉院に由来するかどうかの決め手にはならない。ところで、現存しない正倉院本の本文は不明であるが、古写経系と版本系が同一の記述であった場合、正倉院本も同様だったと推測できる。その中で、『廣弘明集』だけが異なる記述をする箇所があり、さらに僅かであるが高野山大学本がその『廣弘明集』の記述を共有している場合がある。例えば、『弁正論』での「李母」（大

正五二一五二五上）を、『廣弘明集』は「理母」（大正五二一七六上）と記す。また古写経系が「餘善」、高麗版や開元寺版が「餘諸善」（大正五二一五四九下）と記す所を、『廣弘明集』は「餘諸信」（大正五二一一二中）と記す。^①この二箇所を高野山大学本は『廣弘明集』と同様に記す。僅かな記述であるが、古写経系とも版本系とも異なる『廣弘明集』との共有は、もちろん後代の校合の可能性もあるが、高野山大学本が正倉院に由来するのではない可能性を残すものであろう。

なお、二箇所だが『教行信証』と高野山大学本だけが一致する文字が検出された。一つは「免縛隱形」（大正五二一五二六上）が「免縛形」（定親全一一三六五）に、もう一つは「天上地下」（大正五二一五二七下）が「天上天下」（定親全一一三六七）になっている点である。偶然の一致の可能性もあるが、何らかの影響関係も否定はできないであろう。

六 まとめ

本稿は、高野山大学図書館に所蔵された『弁正論』の古写本について、空海請来本を伝える可能性を検討した。その指摘は以下の五点にまとめられよう。①この写本が中世の高野山で書写・校合されている点。②装丁は粘葉装であり、一切経書写の形式ではなく、単行本として伝わっていた可能性。③全体の構成が開宝蔵以降の版本系ではなく、古写経系と同

じであり、しかもその構成は空海入唐と同時代の『慧琳音義』にも見出せる点。④他の古写経系には見られない音釈をもち、それが福州開元寺版音釈の原型である可能性。⑤本文の中で、古写経系とも版本系とも異なる『廣弘明集』との共通点が存在し、正倉院に由来するのではない可能性。

この検討結果から、確証は欠くものの、高野山大学本が空海請来本を伝える可能性は十分にあると考える。今後は、更なる本文の精査と未調査の他の古写本の検証が課題である。

- 1 『大日本古文書』編年文書之九、東京大学史料編纂所、一九九八、三九一頁。
- 2 大正五五―一〇六四上。
- 3 この写本の存在だけは、『仏書解説大辞典』（大東出版社、一九三三―一九三五）の『弁正論』の項目で石橋誠道が紹介している。
- 4 『密教大辞典 縮刷版』法藏館、一九八三。
- 5 寛元三年（一二四五）「東寺結縁灌頂所巻数」という史料に「権律師法橋上人位巖果」との署名があり、時代的に同一人物であろう。『鎌倉遺文』補遺編・東寺文書第一巻七五頁、東京堂出版、二〇一一。
- 6 大正二一―二九三中「若常く七分、二九三下「誦一遍く三毒」。
- 7 なお『弁正論』と不空や空海との接点については遠藤二〇〇二を参照。
- 8 大正五四―八五九中下。
- 9 竺沙二〇〇〇。
- 10 例えば、巻第四に関して『慧琳音義』掲出語句数七四のうち、五一が福州版音釈と重複する。
- 11 『大正蔵』脚注によれば、思溪版は「餘諸信」とある。

高野山大学図書館所蔵『弁正論』について（藤原）

〈参考文献〉

- 遠藤祐介「空海の国家観の変遷について——『三教指帰』と『弁正論』を軸として——」『智山学報』第五十一輯、二〇〇二
- 竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇
- 藤原智「日本古写経『弁正論』と親鸞『教行信証』」『日本古写経研究所研究紀要』第二号、二〇一七
- 山田健三「漢訳版経附載音釈に関する基礎的研究（課題番号 一五〇二二二二三）成果報告書」二〇〇五
- 山田健三「福州版一切経附載音釈の形成過程」『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』第四三号、二〇〇九

高野山大学図書館には『弁正論』の閲覧および利用の許可を頂いた。奥書翻刻には川端泰幸・大舛啓・前島信也の助言を頂いた。福州開元寺版は、宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―書誌書影・全文影像データベースを参照した。金剛寺本、七寺本巻第四の閲覧には、国際仏教学大学院大学付属図書館日本古写経データベースを利用した。また七寺本巻第六・第八、興聖寺本、思溪版巻第四（岩屋寺蔵）の閲覧には、国際仏教学大学院大学附置日本古写経研究所御当局の格別の御高配を頂いた。関係各位には深く感謝申し上げる。

〈キーワード〉 法琳、空海、親鸞、教行信証、音釈、一切経（大谷大学真宗総合研究所東京分室PD研究員・博士（文学））